

## 三重大学医学部附属病院リハビリテーション科

百崎 良 先生

三重大学医学部附属病院リハビリテーション科科长・教授

リハビリテーション科専門医を  
たくさん育てたい

三重大学医学部附属病院リハビリテーション科は2020年に創設し、初代の教授として百崎良先生が着任されました。「母校の東京慈恵会医科大学リハビリテーション医学講座主任教授で日本リハビリテーション医学会理事長の安保雅博先生が三重県のご出身という縁と、リハビリテーション科専門医をたくさん育てたいという自分の願望もありました。三重は気さくで温かい人が多く、現在の環境に大変満足しています。」と教授着任の経緯をご説明くださいました。

リハビリテーション科ができるまで病院にリハビリテーション科専門医がいなかったため、スタート当初は他の診療科のスタッフにリハビリテーション医学・医療の重要性を理解してもらうために尽力されたそうです。「急性期の患者に対するリハビリテーション医療のメリットや重要性をICUなどのスタッフに説明すると、『何となく重要なのはわかっていただけ、説明を聞いて理解できました』と快く受け入れていただけることが多かったため、やりがいがありました。」と当時を振り返る百崎先生。

急性期リハビリテーション加算の  
実現を目指して

忙しい臨床業務の傍ら、急性期リハビリテーション加算の実現を目指して、資料づくりも行われたそうです。「2023年5月からおよそ4,000件のデータを集め、約1カ月で集計とまとめをしました。データを集めるための調査設計に苦労しましたが、日本の医療を変えるためには即効性の高い手法だと思いました。」とおっしゃる百崎先生。

実は、百崎先生は東京大学大学院医学系研究科



百崎 良 先生

三重大学医学部附属病院  
リハビリテーション科

病床数：685床（うちリハビリテーション科病床なし）、スタッフ構成：医師7名（応援医師含む）、理学療法士14名、作業療法士6名、言語聴覚士5名  
〒514-8507 三重県津市江戸橋2-174

公共健康医学専攻を卒業されており、そこで学んだ「臨床疫学」「生物統計学」「保健医療経済学」などの知識がこのときに大いに役立ったそうです。「ガイドラインのつくり方なども学んだことで、ガイドラインをみるとどんな研究が足りていないかがわかり、新たな研究テーマをみつけるのに役立ちました。一緒に研究する若手がたくさん集まることを期待しています。」とのこと。

Evidence-based approach に  
力を入れて指導

専攻医の受け入れ数は毎年4名で、現在は2名の専攻医が在籍しているそうです。研修プログラムの特徴について百崎先生は、「Evidence-based approach に力を入れて診療・教育・研究の指導を行っています。病気だけを診るのではなく、家族や



脳卒中に対する経頭蓋磁気刺激療法を導入



運動器エコーを駆使しボツリヌス療法を実施



さまざまな先進医療の推進にも挑戦



リハビリテーション部全員集合

家屋や社会資源などを含めた包括的なものの見方ができるリハビリテーション科専門医を育てます。また、プログラム期間中に、三重大学大学院で学ぶことができます。東京の大学病院とも連携しており、希望者は大都市でのリハビリテーション診療を体験することができます。また専門医を取得するには脳血管障害・頭部外傷、運動器疾患・外傷、外傷性脊髄損傷、神経筋疾患、切断、小児疾患、リウマチ性疾患、内部障害など100例以上の経験症例が必要です。そのため、まんべんなく経験できるよう、カリキュラムを組んでいます。」と説明くださいました。

さらに百崎先生は、定期的に医学生と研修医を対象に「三重大学リハビリテーション体験セミナー」を定員5名で行っているそうです。「リハビリテーション医療（特になんりリハビリテーション、

呼吸リハビリテーション、心臓リハビリテーション）、リハビリテーション科専門医の日常臨床業務や臨床研究の見学、嚥下内視鏡検査、嚥下造影検査、ボツリヌス療法、装具療法、各種刺激療法、高次脳機能評価、運転技能評価、VR（バーチャルリアリティ）やアプリなどのデジタル技術を活用したリハビリテーション医療などを体験してもらいます。」と説明くださいました。

専攻医の加藤佑基先生は、「患者さんの生活、能力を中心に考えるリハビリテーション医学に魅力を感じ、後期研修を始めました。現在、日々の診療に加え、論文執筆、学会発表などの機会も多くいただけており、なかなか充実した後期研修医生活を送れています。」と後期研修の様子を話してくださいました。（文責 広報委員会）